

海外だより

ミュンスター大学

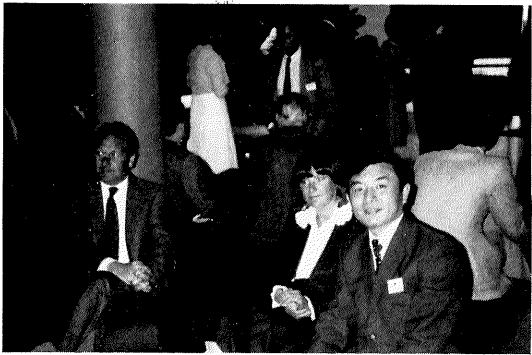
木 田 浩 隆

若い頃からドイツに夢を馳せていましたが不惑に垂んとする今実現し、4月からミュンスター大学医学部の整形外科で働いております。働くと言っても言葉がからきしですから手術の助手を専らとし、病棟の勤務や当直に当ることは今はまだ叶いません。

手術は平均10例は行われ、私が興味を持つ脊椎の分野でも豊富な症例に恵まれております。殊に、マチアス教授が脊椎側彎症の手術を積極的にされるので、この方面に経験の乏しい私には願ってもないことでした。



ミュンスター大学整形外科（正面）



同僚のハイネ夫妻と筆者（学会場にて）

こちらの人の手術は、皮切から創の縫合に至る迄、皆、一様の手技の下に行われ、所謂自我流というのがないようです。いい加減なところのない、ことさらに確実を貴ぶやり方は、さながら重戦車の歩みに似て、なる程、時間は少々かかって、安心して目的地に達し得るものと感じ入っております。

ミュンスター市は人口27万人中、学生が4万人を占める静かで美しい大学街です。ここに、日本語を学ぶ学生が3人おり、中2人がマチアス教授の計らいで、交換会話に来てくれるようになりましたので、私のあやつるドイツ語に辟易としている我が同僚諸兄はひたすら刮目して待つべきでしょう。

「日の丸の色ではないですか」などと勧められ、赤い色にはじめ戸惑いつつも BMW の中古車を手に入れましたが、その翌日には、同僚の止めるのも聞かず、右側を走ることのみ念頭に、名にし負うアウトバーンを1人でぶっ飛ばしました。速度制限はなく、高速料金も要らず、こればかりは日本に帰ってその有難味を懐くことでしょう。

20数人の医局員は勿論、私が他生の縁で知合うドイツ人は正に例外なく親切で、ある本に ghostis（異民族）というインド・ゲルマン祖語が、ラテン語では hostis（敵）となりドイツ語では Gast（客）と変わったとありましたが、

これが実感として肯けます。忘れてならないのはやはり祖国日本の実力でしょう。イランやヨルダンからの同僚が「日本人はいいよなあ」と溜息をついたのが印象的でした。Dr. Kida! Wie geht's Ihnen? としょっちゅう聞かれますが答は常に Danke, sehr gut! です。

最後に皆様方の益々の御発展をお祈りしつつ筆を置きます。

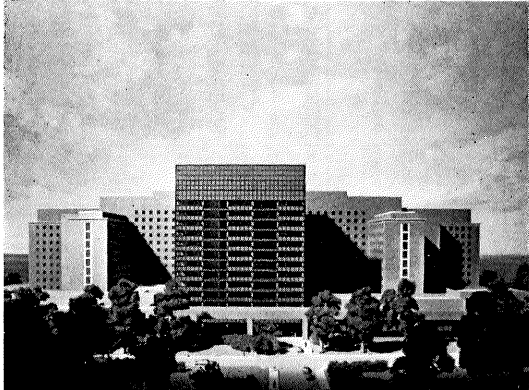
連絡先: Dr. Hirotaka Kida
Orthopädische Uni-Klinik, Hüffer-str. 27
4400 Münster, Bundesrepublik Deutschland

N. I. H. から

西 川 望

私が N. I. H. にきてから2ヵ月が過ぎました。まだ2ヵ月では研究の成果云々というわけには行きませんので、この辺の状況をお知らせしたいと思います。

N. I. H. は合衆国の首都ワシントン D. C. から北西へ約5マイルの所にある Bethesda という町にあります。Bethesda はワシントン近郊の高級住宅地として発展しつつある町で、現に2年後の完成に向けて地下鉄の建設も進んでいます。Bethesda はワシントンに近いために治安に問題があるのではと言われますが、そういうこともなく住みやすい町です。しかしながら警官は簡単にピストルを抜くようで、私も市の駐車場で私の隣に駐車している乗用車の運転者に向かって、ピストルを構えてから自動車を降りるよう指示する場面を目撃しました。こちらにきて5日目位のこと、映画やTVと同じことが行われているのでびっくりしてしまいました。



NIH Clinical Center (NIH 最大の Building で NCI 等多くの研究者がいる)

N. I. H. はそのような Bethesda の一角を占める Life Science の総合研究施設で、Institute と名付けられたものだけで12部門あり、その他に Clinical Center, National Library of Medicine, Animal Building 等があります。これらの建物は芝生と木立に区切られて広い敷地に点々と散らばっています。ここに働く人は約14,000人、その3分の1が何らかの Dr. の資格を持つ人です。

私の所属するのは N. I. D. R. の Neurobiology and Anesthesiology Branch で Chief が Dr. Dubner です。彼は昨年6月来日した時に福大で講演をしています。この基礎部門には研究者が15人、そのうち Dr. が12人いて、外国人は私を含めて5人います。私以外に阪大歯学部からきている日本人 Dr. がいますが、研究室では日本語は使えないよう互いに気を付けています。申し遅れましたが、N. I. H. には日本人研究者はかなりの数で、3週間毎位に発行される NIH Record という新聞にも必ず2、3人の新着の日本人研究者の名前が載っています。

私の研究室は Building 30の地階にあります。他の地下室を持つ NIH の建物も同様ですが、地階は核攻撃に備えての Shelter の機能を持っていて、Capacity 250という標示がされています。最初にくれた NIH の電話帳にも核攻撃の項目があり避難の仕方まで詳しく記載してあり、普段はのどかな風景しかない研究所ですが、キナ臭い世界と目の鼻にあることを痛感します。核攻撃の Shelter になるく

らいですから地階は外の光や音から隔絶されており、天気が良くても悪くてもさまざまな誘惑に負けることもなく、いささか効き過ぎのエアコンの中で実験できるようになっています。しかしこの研究室の連中の帰宅は概して早く、4時頃には半分位の数になっており、実験もうまく行っても行かなくても遅くとも7時頃までで終わらせるようで、日本の意味もなく遅くまで残っているのが熱心な人間というようなことはないようです。当然、私もその良い習慣は取り入れて仕事のない日は早く帰宅するようにしています。

現在の仕事の内容は、脊椎後索を上行する痛み刺激に反応するニューロンを腰髄後角で検出し、その細胞内に HRP という酵素を注入して染め出し脊髄後角内での神経回路網を明らかにすること。その他に、脊髄の Substantia gelatinosa の Enkephalinergic な cell を同様に染め出して、他の Lamina 4 などへの影響を見ることなどをやっています。(1981年6月3日)

連絡先: Nozomu Nishikawa, M. D., Ph. D.
NIH Bldg. 30, Room B-24
Bethesda, Md 20205, U. S. A.

オレゴン大学

中 島 秀 喜

昨年11月より Oregon 州 Portland にある University of Oregon Health Sciences Center にきております。アメリカ北西部は冬が雨期で着いたその日から雨が降り続き、慣れない生活に加え毎日の雨で当初大変な所へきたものだと思います。ここ Portland は利谷教授も以前おられ、その関係でこちらの Wuepper 教授に私を紹介いただき留学の機会を得た訳ですが、そういうこともあり利谷教授のことを覚えていらっしゃる先生も数人おられ、また一般に西部の人は皆親切でこちらの生活に慣れた今は、私にとって住みごこちのよい場所となっております。また、Portland は Rose City とも呼ばれ、公園、道路わき、庭あらゆるところにバラが咲いており、先週から Rose festival が始まり、ますますこちらの生活は楽しいものとなってきております。



University of Oregon Health Sciences Center

さて UOHC の皮膚科は Chairman が Porker 教授で研究棟に Wuepper 教授と Hanifin 教授の研究室があり、私はそこで生化学実験、免疫学実験を行っています。毎週金曜日には研究部門の関係者が集まり仕事の報告やら計画等を話し合います。その他、毎朝レジデントを中心とした臨床カンファランスがあり、また、希望者が自由に聴講できるセミナーやら講演もよく行われています。あちらこちらに顔を出しこちらの生活を充分に楽しんでいる毎日です。

取りとめのない報告になりましたが、最後に皆様の御健康と発展をお祈りしつつ筆をおきます。

連絡先: Dr. Hideki Nakashima
Department of Dermatology, University of Oregon Health Sciences Center, 3181 S. W. Sam Jackson Park Road, Portland, Oregon 97201, U. S. A.

第二回対島巡回診療

患者の追跡調査

診療団副団長 松崎昭夫

昭和五十五年七月二十四日より四日間、西園医学部長を団長とする福岡大学医学部診療団による第二回の対馬巡回診療が行われた。その概要及び結果については福岡大学医学部紀要第七巻四号に記載した通りである。巡回診療の際沢山の患者に対し、手術、入院治療をすすめたり、現地医師への紹介を行った。「診療の仕放し」に終わらせないため、これら患者のその後の状態を知り、必要なら患者のためにできることを考えてあげるためと今後の参考にするために病院の安永課長の手をわずらわし追跡調査を行った。各科担当者に診療録及び巡回診療カードに目を通してもらい、右記の指導を行った患者を選び出していただいた。この中から診療責任者が一応チェックしておいたがよい、と判断した患者を選び調査対象とした。方法はアンケート様式によった。回答率は半数に満たなかったが結果は表の通りである。治療側から見て問題にしなければならなかったような患者はほとんどが治療を受けていた。返事のなかった者は日常生活には大して障害のないような軽

結果、診療団が入院治療が必要と判断し、指導したものはその通りにしてくれているものと思われる。今回回答の得られなかった患者やアンケートを出さなかった患者の問題を解決してやる事は現在の我々の力では不可能である。しかし、辺地医療の大きな問題がここにある事は間違いない。国立病院を支援することなどを通してわずかでも我が医学部が問題解決に寄与しつつある事はよろこばしい事である。第二回対馬巡回診療の追跡調査を行ったので結果を簡単に報告した。医学部助教・整形外科

	耳鼻科	小児科	眼科	整形外科	皮膚科	計
フォローアップ総数	17	12	3	24	10	66
福岡大学で 外来受診、治療済み 入院治療、手術済み 入院予約中	1 1 2	1	1	5	1	3 7 2
小 計	4	1	1	5	1	12
他医療施設で 通院治療中 入院治療、手術済み 通院・その他で治療 死 亡	1 1	1 1		1 1 3	1 1 2	3 3 6 1
小 計	3	1	0	5	4	13
治療を受けていないもの	2			2		4
回答を得られなかったもの	8	10	2	12	3	35
新たに福大受診又は治療をすすめたもの	2			2		4
回 収 率	52.9%	16.7%	33.5%	50.0%	70.0%	47.0%
現 地 受 診 者 数	274	96	335	295	283	



第 4 回 卒 業 生 (昭和56年 3 月21日)

福大医学部卒業生 340 名に
医師は 289 名

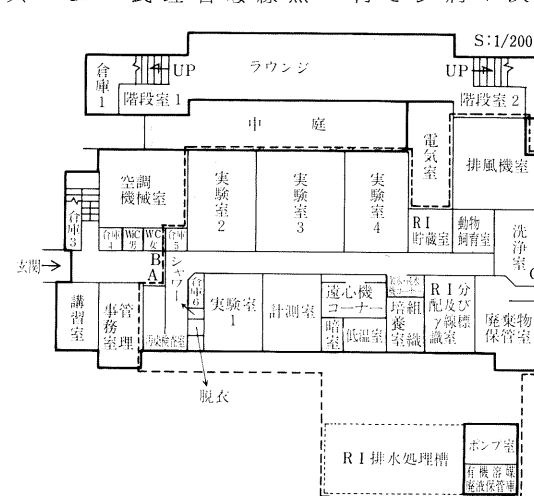
昭和五十二年三月、第一回生を送り出したから、今年で第四回卒業式を迎えた。今回は福大医学部の歴史が始まって以来始めて、百名を超す一〇四名の卒業生が揃っていった(写真参照)。これらの諸君をあわせて福大医学部卒業生は計三〇四名となったが、医師国家試験に合格して、現在医師として活躍中の諸君は二八九名である。大部分の人は福大医学部・病院でそれぞれの目的に従って、より高次の医学の勉強に励んでいるが、新天地を求めて福大以外の大学ないし病院に勤務している人もある。ここにその諸君の氏名・勤務先を記し、連絡の便に供したい。

- ◎第一回卒業生
- 安部 英彦 九大薬理学
大原れい子 九大細菌学
児玉 芳久 宮崎医大眼科
下津浦康裕 久大第二内科
田辺 完 山口大内科
中川 俊正 阪大第二内科
永瀬 浩一 佐賀医大皮膚科
英 保彦 宮崎県市町村開業
日山 昇 広島医大眼科
藤田 晃 長大産婦人科
松崎 恵子 久大精神科
松尾 直樹 長大眼科
宮崎 直知 福岡記念病院整形外科
- ◎第二回卒業生
- 池田 英雄 久大第一内科
金谷 通 昭和医大眼科
金子 保幸 産業医大泌尿器科
北村 亨 宮崎医大第二内科
国富 康彦 岡山医大外科
坂田 道子 九州厚生年金病院産婦人科
浜畑 和人 鹿児島県田代町開業
原 武子 九大眼科
原 吉幸 阪大眼科
古林 芳範 阪大眼科
堀内却己子 奈良医大内科
三嶋 祐治 久大第一内科
山下 行博 鹿大第一内科
山下 互 鹿大第二内科
李 統祥 大阪市大眼科
押川 達己 宮崎医大第一内科
甲斐 保 久大第一内科
白石 正浩 宮崎医大第一内科
中原 俊尚 久大第一内科
吉村 芳和 久大第一内科
- ◎第三回卒業生
- 大隈 良成 佐賀医大産婦人科
大慈弥裕之 防衛医大
小田島安平 東京女子医大
小緑 尚 琉球大整形外科
河野 優子 久大小児科
合屋 友望 九大 ICU
高浜由梨子 熊大眼科
竹下 盛重 九大第一内科
田尻 明彦 宮崎医大皮膚科
西野美貴子 長大整形外科
広瀬 妙子 九大眼科
三宅敬二郎 岡山医大第一内科
横手 祐司 広島赤十字病院内科
磯辺美樹彦 久大第二内科
川平 正純 鹿大第二内科
下稻葉耕生 鹿大泌尿器科
新牧 一良 鹿大第二内科
中山 善一郎 産業医大皮膚科
浜畑 俊仁 鹿大第一外科
- ◎第四回卒業生
- 川畑 悦男 鹿大第一内科
加治屋芳樹 鹿大放射線科
加藤 正春 九大眼科
倉光 正春 九大眼科
小山 雅也 岡山医大眼科
真田万紀子 九大産婦人科
津村 和孝 久大眼科
橋口 清明 熊大眼科
蓮尾 春高 久大第一内科
正田健次郎 大牟田労務病院神経内科
松尾 行雄 広島医大内科
松永 博喜 久大精神科
真栗城兼清 熊大
松村 真門 久大小児科
吉村 隆宏 佐賀医大産婦人科
鎌田 恵一 大分医大整形外科

医学部 R I 施設
活動開始

ニュース第二号(二頁)に紹介したとおり、アニマルセンター東側・研究棟南側に新講義棟と共に建築中であつた医学部 R I 施設は今年三月末に完成、鋭意活動準備中であつたが、六月三日付で運営の細則も決まり、六月十二日より実際の活動を開始した。

医学部 R I 施設の実現により福岡大学 R I センターは二つの事業所(従来の R I センターを R I センター実験施設に改称)をもつことになる、それぞれに施設長がつかれることになった。新たに設けられた医学部 R I 施設長には生化学第二池原征夫教授が就任した。同施設の運営は「医学部 R I 施設



医学部 R I 施設平面図

動物飼育室では、糞尿の処理が床敷きを用いた乾式でやれる動物に限られるので、主としてマウス、ラットで、せいぜいモルモットまでしか使用できない。ウサギ、犬

カワイオクから階段で降りることもできる。全体で七八五㎡の広さを持ち、その配置は附図のとおりである。ニュース第二号の紹介

管理区域へはいる。管理区域には、1、2、3、4の実験室、計測室、暗室、低温室、遠心機コーナー、純水機、製氷機コーナー、組織培養室、R I 貯蔵室、R I 分配及び

かねてよの設立準備が進められていた医学部同窓会は、去る七月四日、福岡国際ホールにて第一回総会が開催された。福岡大学には同窓会組織として有信会がすでに古くから活動しており、全学卒業生一丸となって会員相互の親睦と母校の発展に寄与して来たが、医学部を卒業して医師となったものは、生涯教育のため常に母校との密接な連携が必要であること、日



祝辞を述べる朝長病院院長

当日は医学部卒業生六十二名の出席があつたが、そのほか福大病院院長の祝辞が述べられた。

同日総会終了後懇親会にうつり、各人それぞれ旧交を暖めながら、和気藹々のうちに会を終った。なお総会は毎年一回、七月第一土曜日に開催されることになり、第一回総会は昭和五十七年七月三日に行われる予定である。

会則によれば、本会は福大医学部卒業生を会員とし、その中より会長一名、副会長二名、理事、監事、評議員それぞれ若干名が選ばれ、これら役員がおののの任務に従って会の運営にあたることになっている。そのほか医学部長は名誉会長、医学部教授・教職員・大学院修了者は名誉会員または特別会員に推されている。

医学部同窓会発足
会長に山崎、副会長に高良・吉田各氏

編集後記

福岡大学に医学部が開設されてから足掛け十年、医学部、病院キャンパスは大きくさまざなりました。今年度は新講義棟と R I 施設が加わり、本学の教育・研究に大きく貢献するものと期待されています。

今回のニュースでは、新講義棟の竣工を記念して催された「福大に医学の殿堂を」と題する講演を紹介することにしました。紙面の都合上、江崎、古川両教授の講演要旨しかお伝えできないのは残念であるが、きわめて示唆に富む有益なお話で、医学部生を対象にしたとはいえず、若者に優るものもあつた。これら役員がおののの任務に従って会の運営にあたることになっている。そのほか医学部長は名誉会長、医学部教授・教職員・大学院修了者は名誉会員または特別会員に推されている。

また長年の懸案であつた医学部 R I 施設も同じ建物の中に完成し、六月より活動を開始した。前号のニュースと重複するところもあるが、可能な限り具体的に紹介したつもりである。

本年三月には第四回卒業生を送り出し、福大出身の医師は二八九名に達した。それぞれ自らのおかれた立場で活躍されており、同窓にたえないが、このほど同じ釜の飯を食った者同志の連帯意識をかためるために、卒業生の集いが催された。卒業生が集うことがこの会に参加できなかった会員のために、浜崎潤、吉田隆両君をわざわざ、そのあましを報告してもらつたが、このニュースも卒業生諸氏の活動のために大いに利用したいと大いに考えている。

海外で活躍中の諸氏からは、今号にも四編のレポートを送つていただいた。現在編集部の手許にある資料では八名のスタッフが長期の在外研究に従事している。本学医学部卒業生諸氏が、これらの先輩についで海外に飛躍し、世界に開かれた医学の殿堂をこの七隈の地に打ちたててほしいものである。

学内の各教室の情報は、各科のレポートの方をわすれず、各科の国際誌に発表された論文などを寄せて下さったところもあつた。編集者自身、どのような紙面をお届けしたらいいか、いまだに暗中模索をしつづけている。ご意見やご要望をぜひお寄せ下さるようお願いする。

(R・S)